

## 『平和の栖（すみか）』

2019年08月10日

今年も8月の6日に「広島」で、9日に「長崎」で、「平和祈念式典」が行われた。私は一度、広島原爆資料館を訪ね、平和公園を歩き、原爆ドームを見ただけで、記念式典には参加したことはない。二次被爆された人が「この時期になると、体に吹き出物が出てくる」と言われたことを思い出し、私もこの時期になると広島・長崎のことが気にかかる。本屋で、作家でジャーナリストの弓狩匡純氏が著したノンフィクション『平和の栖 広島から続く道の先に』が目にとまった。450頁の大部の本である。広島の復興をテーマにした著作であるが、これだけの大部に仕上げたからには、関連する記述が多いただろうと思った。「注」も膨大で、取材に熱を入れ込んでいることが想像された。多岐に渡る記述から刺激を受けた2点についてのみ、私の感想を書いてみたい。

被爆体験者の平均年齢は82歳を超え、被爆者の声を聞くことは、年々少なくなっている。被爆者の声は限りなく重い。一発の原子爆弾によって、数千度の高熱で焼き殺され、爆風に叩きつけられ、瓦礫の下で圧死し、放射線による惨い被爆死をもたらされた。私などが見聞きしたことはほんの一部で、地獄を体験した被爆者とは天と地ほどの違いがある。戦争体験者も減り続け、体験していない者の戦争への認識は甘く、平和が危うくなっていると聞く。体験者からの伝承が難しくなっていることは事実であるが、人間は想像力と共感力を持っている。被爆した人々の耐え難い苦しみを想像することはできるし、その苦しみに抽象的ではあろうが、共感することはできる。想像力と共感力を持つことが人間であることの証しである。だから、被爆体験者の生の声を聞けなくとも、文字や映像を見聞きし、被爆者の心に寄り添い、事実を伝承することはできる。弓狩氏は、1959年に兵庫県で生まれている。広島に関わりなく、戦争体験も持っていない。しかし、被爆者に寄り添い、彼ら、彼女らの心を伝えることにこれほどの情熱を傾けている。体験者とそうでない者との断絶はあるが、乗り越えられる。それが「広島から続く道の先に」ではないか。

本書の主題は広島「街」の復興である。街復興のキーワードは「平和」であった。原爆は一般市民を無差別に殺害した国際法違反の戦争犯罪である。木原七郎市長は市議会で「然ルニ原子爆弾ノ一撃ニ依リマシテ美事ニ軍都広島ヲ破却一掃致シ此ノ一撃ハ市民ノ軍国主義ヲ根絶セシメタト同時ニ広島市ガ軍都ト正反対ノ『平和』学術教育ノ都市トシテ再出発スベキ絶好ノ機会ヲ与ヘラレタ」と演説している。また、「ええじゃないか、平和都市。わしらがピカドンちゅう人類史上最悪の兵器によって命を奪われた。夢も希望も、何もかも壊されてしまうたんじゃ。わしらしか『平和』の尊さを訴えられるもんは他におらん」という思いを共有していった。戦争犯罪の激痛を受け止め、これを逆転させている。彼らが言う「平和」は「パックス・アメリカーナ（米国の平和）」の平和観とは全く違う。

「米国の平和」は諸々の紛争を武力によって解決した後の不戦状態を指す「平和」である。「恒久平和」を目指した日本国憲法の前文は、「専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と謳っている。この前文は、社会格差や貧困、飢餓、環境問題や性差別などを作り出さないことによって「平和」を追求すると宣言している。広島の街再建の礎とした「平和」と憲法前文の平和理念は通底している。武力を背景にした見せかけの平和ではなく、人間の尊厳を見据えて、一人ひとりの命と安全を保障する平和である。広島市民の「平和の栖」を再建する忍耐強い闘いは、平和を追い求めることは戦争に向かう力に対して「ノー」を叫ぶことであるが、同時に、現実生活の中で他者を寛容に受け入れ、ヘイトクライムをしない地道な生き方と結び合っていることを教えている。